

自己は多面化しているほど心理的に適応しているのか：体制化からの再検討

杜, 健

<https://hdl.handle.net/2324/4495988>

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	杜 健			
論文名	自己は多面化しているほど心理的に適応しているのか： 体制化からの再検討			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	加藤 和生
	副査	九州大学	教授	中村 知靖
	副査	九州大学	准教授	伊藤 崇達
	副査	九州大学	准教授	小澤 永治

論文審査の結果の要旨

自己の多面性（自己概念分化度，知覚される自己行動変動性）と心理的適応との間には，正の関連がある（人格社会心理学）のか負の関連がある（臨床心理学）のかということが，以前から議論されてきた。だが，未だに一致する見解に至っていない。本論文は，この相反する2つの立場の理論的・実証的研究を詳細にレビューすることで，従来の研究が自己多面性を「(自己概念)分化度」の側面からしか議論・分析してきていないことを明らかにした。さらに，そこに体制化思考傾向に注目することで，この矛盾した結果を一つの包括的な枠組みで理解できることを提案し，健常大学生を対象に2つの質問紙調査研究をとおして，それを実証した。まず，自己概念分化度，体制化思考傾向（個人能動性レベル），心理的適応（主観的幸福感）との関係を検討し，従来の矛盾する研究結果を追試確認すると同時に，体制化思考傾向の高低により，分化度と心理的適応の相関関係が逆になることを実証した。さらに研究2では，体制化思考傾向が自己概念体制化に影響し，分化度と相互作用することで心理的適応を規定していることを明らかにした。このように，一見，自己多面性とは無関係とみられる体制化思考傾向が，自己の状態と心理的適応との関係に深く関わっているという知見は，これまで未解決のままにされてきた難問の解明への一つの手掛かりを提供してくれるもので，非常に価値ある研究といえる。また，常に先の研究結果を追試しながら新しいものを加えていくという慎重な研究姿勢，目前の理論だけでなく異なった領域へも注意を払っている点など，研究者としての姿勢もまた高く評価できる。よって，本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。